

# 山と博物館

第27巻 第3号

1982年3月25日

大町山岳博物館



マンサクの花 撮影 斉藤忠彦

## 春風雑感

昨年暮の大雪にくらべ今年は降雪量が少なく、北ア山麓にすむ私たちは「かなり楽な冬」だったと思っている。しかし、冬はやはり冬であり結構それなりに厳しい。

今年も例年のようにフキノトウの油味噌を肴に杯を傾ける。それには春一番のほのかなホロにがさと共に春の暖かさがある。

このフキノトウ、何人も人間サマばかりが賞味しているわけではない。山のカモシカも食べるのである。

雪深い地方にすむカモシカにとって、長い冬の生活は厳しい。ことに雪の多かった年の難儀のほどは、雪崩や栄養不良による死体が例年より多くでることからも推察することができる。深い雪の中で乏しいエサで細々と生命の灯をともし続けてきた彼らにとって、再び巡ってきた春の中で口にするフキノトウの味は、また格別なものに違いない。

植林地の植林木の食害に端を発したカモシカの捕獲は年を追うごとにエスカレートし、五十六年度では岐阜県で三百七十七頭、長野県で二百四十九頭が捕獲され、うち僅か五頭が生体で捕えられたにすぎず、他は殆んどがライフル銃や一般銃で撃ち倒された。

この数字は食害地周辺に生息するカモシカにとつては、「発見既死」につながるというつても過言ではない。

最近の長野県のカモシカはライフルの標的となつた上、「長野県獣」からもはずされようとしている。

再び巡ってきた春の中で食害地周辺のカモシカはどんな気持でフキノトウを味わっているのだろうか。「よくぞ生きのびたり」と思っているのかも知れない。しかし、ライフルの銃口は再び間違ふことなく彼らをねらうことになるであろう。巡ってきた春の喜びなどはそれは一瞬の夢に過ぎない。

そこへいくと植林地のない北ア山中のカモシカは倅せ者ということもいえないが保護区設定終了後は同じ運命をたどるのかも知れない。

# ライチヨウの換羽

宮野典夫



冬羽のオス



換羽中のオス

ライチヨウの学名には「ふさふさしたウサギの足のようなだんまり屋さん」という意味があり、この名のように足にも羽があり、きびしい山岳地帯での生活に適した体になっている。同じ高山の鳥でもホシガラスやイワヒバリなどはいずれも冬になると標高の低い山麓に漂行するが、ライチヨウは冬になっても高山で生活している。

ライチヨウの特徴としてもうひとつ、夏と冬とでは羽の色が変わることがあげられる。

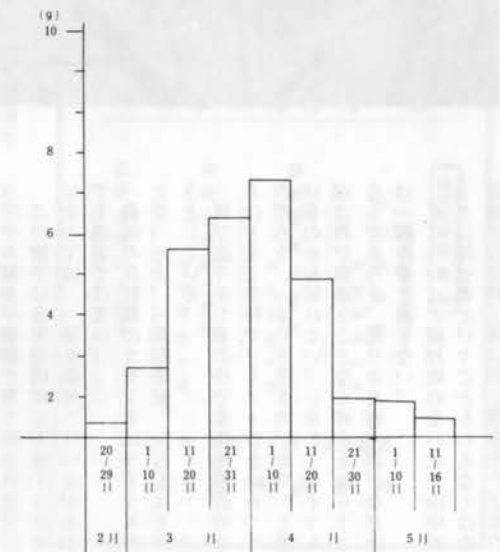
このように鳥の羽が一定の順序で更新することを換羽、あるいは羽換わりという。鳥によって換羽の時期や、それに要する期間が異なっているが、通常は繁殖期の前後にみられる。

換羽は日照時間によって定まり、視床下部・脳下垂体系や甲状腺などの内分泌系によって制御される。しかし、羽の色素形成など、換羽の機構はよくわかっていない。

ライチヨウの場合、繁殖期前に冬羽を脱落

させて、夏羽が形成され、繁殖期が終るとさらに換羽を進める。そして、晩秋にもう一度体羽を更新させて冬羽となる。

冬から春へ  
冬のライチヨウは白い羽で体を被い、周囲の雪と同じ色となる。雪の中で静かにしているライチヨウは注意して見ないと、どこにいるのかよくわからない。ただし、オスは口もとから目にかけてと、尾羽の先が黒く、メスは尾の先だけがや



抜け落ちた羽の重量 (オス2羽分: 昭和55年)

はり黒である。

十二月から二月の間に飼育舎内で脱落した羽を見ることはほとんどないので、冬のライチヨウは換羽はしないようである。

二月下旬になるとオスは独特な声を出して鳴くようになり、繁殖に必要なナワバリ形成の準備を始める。このころになると寒さの緩む日もあり、飼育舎の砂が雪解け水を含み、純白だった羽も腹や足に汚れがめだつようになる。そして、頭部や首に黒い羽が表われ、換羽が始まる。同一飼育舎内で飼育しているライチヨウでも個体により換羽開始や進み具合に差があり、社会関係による優劣、健康状態などを調査して

みないとわからないが、メスよりオスの方が先に白くなるようだ。

二月下旬か三月上旬から始まった換羽は少しずつ黒の部分が多くなり、四月ころには白と黒の斑点模様となり、六月上旬にはすっかり夏の姿になる。夏羽はオスが黒褐色、メスは茶褐色に黒と白の縞模様であるが、胸から腹にかけては、冬と同じ白色である。

昭和五十五年二月二十日から五月十六日まで飼育中のオス二羽の羽を毎日収集し、○・○一グラムまで測定できるハカリを用いて得た結果では、三月中旬から四月中旬の一ヶ月に換羽が集中していることがわかった。このうち一日で一グラムを上まわったのは三月二十九日の一・二二グラムと四月五日の一・三六〇グラムであり、四月上旬が換羽のピークといえる。この期間中に脱落した羽はほとんど白色のもので、中央に軸のあるおおばねや、フワフワしたわたばねであり、どの部位から抜けたものかわからない。わたばねの場合、わずかな風で飛ばされてしまうため、収集もれがあると思われる。

ライチヨウの体重は四〇〇〜五〇〇グラム

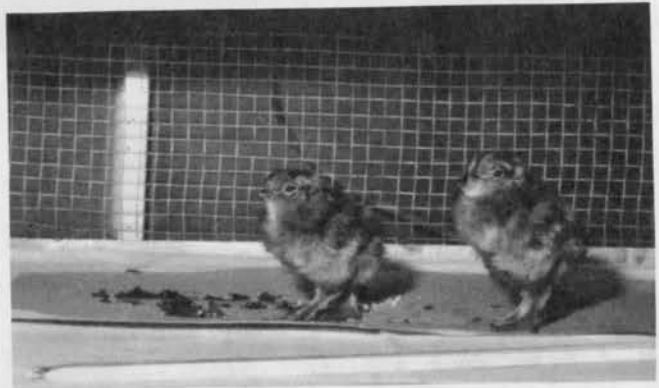


夏羽のメス(左)とオス(右)

であるので、春の換羽で体重の約五パーセントの羽が抜け落ちたことになる。

**夏**  
夏羽になると産卵、抱卵、育雛と繁殖の時期がやってくる。卵とヒナの世話はメスだけが行なう。産卵は六月中旬から始まり、マツの下に簡単な穴を掘り、だいたい一日おきに卵を産み落として、その都度マツの葉をかぶせる。最後の卵を産むと巣に坐り込み、二十三日間、メスだけが抱卵し、七月上旬にヒナが誕生する。

このような飼育下での親鳥による孵化、育雛は今までに二例しかないが、孵化後の巣をみると、いずれもマツの葉と抜け落ちたメスの羽で敷き詰められた巣となっていた。この時期の換羽について詳しい調査をしたことがないが、飼育舎内に抜け落ちた羽もあることから、冬羽から夏羽、夏羽から冬羽というような大きな変化はないが、夏羽の間中も



孵化後2日令のヒナ

換羽を進めているようである。



孵化後7日令のヒナ



孵化後30日令のヒナ

**秋から冬へ**  
十一月になると北アルプスの峰々も雪で白くなってくる。このころライチョウの換羽が再び盛んになってくる。  
前にも述べたが換羽は日照時間と関係があるので、飼育舎周辺に雪がなくても時期がやってくる。徐々に白い羽になってくる。冬羽への換羽では足の羽が白くめだつようになり、足の太さが二倍か三倍にみえる。これは寒さを防ぐためばかりでなく、雪上の歩行時に体が沈まないようなワカンのような役目も果たしているのだらう。

**ヒナの羽**  
ライチョウのヒナは体重約二〇グラムで誕生し、孵化したばかりにはフワフワした褐色のわたばねで被われている。三日令ころから翼が延びはじめ、一週間もすると尾羽、翼がおおばねですっかり被われてしまう。のびてきた羽はメスの夏羽と同じような色と模様であるが、頭と腹と背中はまだわたばねである。三十日令ころには腹も背中もおおばねがつき、頭部にも羽が出はじめる。このころから親の腹下に入って寒さをしのぐこともなくなる。羽が形成されてきて体温の保持ができるようになったためである。  
五十日令になると外観的には親鳥と区別がつかない姿に成長する。しかしまだ体重は三〇〇グラム前後で、鳴き方もビービーとヒナの声である。ヒナの体重が五〇〇グラムと親鳥と同じ位になるのは九十日令の十月中旬である。このころからすでに冬羽への換羽が始まる。そして口ばしから目にかけて黒くなるオスと、その部分が白くなるメスの区別がつくのもこのころである。

ライチョウはみごとな衣がえをするが、ただ調査研究をしないとわからない点がある。換羽をはさみ産卵や育雛を行ない、きびしい冬を越しているが、これは生理的にも負担がかかる、ストレスを与えると病気を引き起こす原因となりうる。その予防のために環境や餌などバランスをくずさない飼育管理に努めたいと思う。  
最後に大町市民をはじめ、環境庁、長野県の関係諸機関と、多くの方々にライチョウ保護事業の御理解と御支援をいただき深く感謝するとともにこれからも御指導、御支援の程をお願い申しあげる。

(山博学芸員)

# 須沼歌舞伎の今昔

横山 一美



一の谷敵軍記 熊谷陣屋の段(昭和28年 松本市民会館)

須沼神明社の舞宮には明治五年、七年に奉納上演された歌舞伎の役割番付が額になって掲揚されている。

時に中央では明治初年の大政変の傷跡が残って不安定な状況であったが、田舎の農村、常盤附近の百姓は貧しくはあったが大平であった。

したがって芸事が盛んで「登文」、「義太夫」、「うたい」、「歌舞伎」、「俳句の会」などが行なわれていた。そのうち「義太夫」

(浄瑠璃)と俳句がさかんであった。須沼歌舞伎についてはそう古いものではないらしい。しかし、歌舞伎の基本となる浄瑠璃については明治以前より伝わっていた(文久二年生れの年寄の話)。

明治五年須沼神明社の舞宮を造営した。その時の宮大工広津村大久保生れの大工の棟梁で市十という歌舞伎の愛好家であり者がきて、村の若い衆に呼びかけ踊ったのが始まりだそうである。

当時その舞宮の完成祝いに上演された芝題と役割番付が額となって保存されている。

浄瑠璃を習得していたので若者は覚えもよいので、たちまち広まって村(須沼)全域にさかんになった。

明治三十年頃、清水嘉兵衛、一志茂一氏外十名ほどが、大谷橋十(大谷橋蔵系の役者か?)という人から指導を受けて始めて人から見られるようになった。(一志茂一氏の話)

大正四年、文楽の大夫、豊升いろは大夫が当地にきて、一志茂一氏に弁慶上使、一志喜六氏に日吉丸、平林寅重氏に太功記十段、等々力織次氏に太功記十段等、冬春当地に滞在していたので毎年のように習っていた(昭和三十年頃まで来ていた)。

大正年間に入り歌舞伎上演は許可せずと官憲の圧迫を受け「上演

するならば鑑札を受けて税を払え」ということになった。

やむなく無鑑札のまま人の家の納屋などを借り受けて、そつと習っていたそうであったが、巡査に踏みこまれるようなこともあったりして次第に衰退していった。

第二次大戦末期、素人演芸がさかんになり、時の村長清水敬一郎、村長横山亮恵氏の援助により、一志茂一外、昔踊った人たちの指導を得て、次第に復活してきた。

義太夫は豊升いろは大夫、升本明石大夫が専属となり松本市裏町、尾上衣裳部よりキラを借り受け、敬老会や収穫祝に上演した。しかし、それは元比べて振付けなども複雑なもので、私共も満足するものではなかった。

昭和二十八年、須沼歌舞伎は飛躍的に発展することになる。それは松本市神明町の坂本清弘氏が自分の喜の字のお祝いに好きな歌舞伎を踊ってみたいから是非協力出演してくれとの要請があり、ついにはそれにかかる費用の一切のめんどうを見るところで、升本明石大夫と関三十郎の高弟関歌助の二名の役者が須沼に派遣された。二月三月の農閑期に振りつけの指導を受け、それは昼夜を通して五日にも及び、上達はいいじらしいものであった。

昭和二十八年四月十日、松本市民会館において奥州安達ヶ原の二段、同三段、一ノ谷敵軍記などが公演され、須沼からは大型バス一台を仕立てて村人が応援にきてくれた。

## 祝

### 野口公民館竣工

—古典藝術の華—

### すぬま歌舞伎大一座

振付指導 関歌助

文部省指定重要無形文化財

一の谷敵軍記  
熊谷陣屋の段

御所櫻 福川夜討  
弁慶上使の場

奥州安達原 二段目  
素任物置の場

奥州安達原 三段目  
油取物置の場

とき 9月30日 正午開演

ところ 野口公民館

野口公民館竣工記念のプログラム(昭和32年)

翌年二十九年にはさらに平假名盛衰記と弁慶上使、大功記十段目等関歌助師の指導により完成習得した。私たちも大いに自信と鑑賞力を身につけた。そして昭和三十年代、四十年代は各地に出向き上演した。その頃が須沼歌舞伎の黄金時代といえよう。

当時一緒に習った人たちはも今では老令となり、あるいは死亡したりしており、若い人たちも育たずだん／＼衰退していき、現在は自分をも含め二、三人の人たちが農作業のあいまに義太夫を口ずさむ程度になってしまった。(大町市常盤須沼)

## お知らせ

本年5月6日より6月4日まで休館になりますのでご注意ください。

山と博物館 27巻 第3号

発行所 長野県大町市 TEL20211

印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館

定価 年額1,200円(送料共)切手不可

郵便振替口座番号 長野四二二二九九三